

お稲荷様と私の
ほっこり日常レシピ

夕日凪 Nagi Yuhi



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

目次

プロローグ

第一章 お稲荷様と初心者カレー

第二章 お稲荷様と初心者お鍋

第三章 お稲荷様と初心者ローストビーフ

第四章 お稲荷様と初心者お弁当

閑話 お稲荷様の独り言

エピローグ

番外編 猫に手を貸し、猫の手も借りた話

プロローグ

新宿駅から快速列車で二十五分。^{しんじゆく}都内とは思えないくらいの緑と山々に囲まれたとあるベッドタウンに私は、^{ふるは}古橋はるかは住んでいます。古橋家は代々この土地に住んでおり、私で六代目なのだそうだ。そのそれなりに長い歴史を想像させる風格ある日本家屋の庭の片隅には、小さなお社がある。

子供の両手で囲えてしまいそうな小ぶりで古めかしいお社には、我が家の守り神であるお稲荷様が住んでいる……らしい。戦争の時には傷つかないようになると、わざわざ地下に安置用の穴を掘つて保管していくくらいに大事にされているものなのだ。私は高校から帰ると、いつもの日課であるお稲荷様へのお供えをしに庭へ出た。お稲荷様への一日一度のお供えは私の仕事だ。

外に出るとびゅっと乾いた音を立てて北風が吹き抜ける。その冷たい息吹に、私は

ぶるりと身を震わせた。

体を擦つて暖を取りたいけれど、手にはお供え物のお盆を持っている。早くお供えをして部屋に戻ろう。そんなことを考えつゝさくさくと玉砂利を踏みつけながらお社に向かうと、それはいつも通りの閑かな佇まいでそこについた。

少しくすんだ赤色の屋根、白木の色が美しい木の扉。その扉を開けると中には可愛らしいお稲荷様の像が鎮座していることを、私たち家族は知っている。それは一見して、ふつうの神社のミニチュア版といった趣だ。

「お稲荷様、お稲荷様。こちらが今日のお供えです」

私は恭しく言うと、お社の前に設置された石台の上にお盆を置いた。お供えといつても昔話のように油揚げなどではなく、私たち家族が食べる夕食と一緒にご飯だ。

今日のメニューはお母さんが作った肉じゃがとだご汁である。ほくほくと美味しそうな湯気を立てるそれを、自分が作ったわけでもないのに得意げな気持ちで眺めてから、私はお稲荷様が喜んでくれることを心の中で祈るのだった。

『コン』

お供えが終わると今日も小さく狐の鳴く声が聞こえた。

私がお供え係をはじめたのは中学二年生の時からである。この声はお供えをはじめた頃から、私には聞こえていた。最初は気のせいかと思っていたのだけれど、お稲荷様と波長の合う一族の者にはこれが聞こえやすいのだと、二年前に亡くなつた祖母が言つていた。古橋家の血筋だけ父には聞こえないらしく、父はそれを非常に残念がつている。

「まあ、聞こえてもなにがあるってわけじゃないけど……」

私は小さくつぶやいてからお社を後にし、縁側から居間へと入つた。

「今日もお稲荷様の声は聞こえた?」

炬燵の上にお供え物と同じ内容の食事の用意をしながら母が話しかけてくる。私はかじかむ手を擦り合わせながら炬燵に入ると、こくこくと頷いてみせた。炬燵の熱により、外で冷えた体がじわりと温まつていく。安堵感から漏れるものにも似たため息を、私はほつと漏らした。

「うん。今日も『コン』って言ってたよ」

「いいわねえ、私も聞いてみたいわ」

母はそう言いながら本当に殘念そうな顔をする。

……お稲荷様の声が聞こえてもいいことがあつた試しはないし、本当にいるんだ
なあと思う程度のことなんだけど。

「そうそう、はるか、話があるのよ」

「いただきます」と言つて食事に箸をつけようとした時、母が真剣な顔でそう切り出した。なんの話かは知らないけれど、とにかく今はお腹が空いてる。高校二年生は食べ盛りなのだ。

「……食べながら聞いてもいい?」

「いいわよ、お母さんも食べながら話すから」

母もそう言つて炬燵に入ると、だご汁を口にしてからほつと息を吐いた。

「そのね、お父さんが何年か海外に赴任することになつて。あの人、一人じゃなんにもできないでしよう? お母さんついていこうかと思つてるの」

話の内容を聞いて私は掴んだジャガイモを箸から取り零した。

——海外に、赴任?

「お母さん。私、志望校決まつてんだけど」

来年、私は受験生だ。海外赴任になんてついていっている場合じゃない。

「うん。だからはるかには申し訳ないけど、しばらく一人暮らしをしてもらおうかなつて。心細いだろうから、時々未散くんにも様子を見に来てもらおうと思うんだけど」

母はそう言うと申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「未散兄ちゃんが来てくれるの?」

従兄弟の未散兄ちゃんは私の初恋の相手で、現・想い人だ。関係を進展させたい私にとって、この父の海外赴任はチャンスなのかもしれない。

「——まあ、いいよ。お留守番しててあげる」

そつけなく聞こえるように返した私を母がなんだかニマニマとしながら見ている気がするけど、私はそれを無視した。

こうして私は、この家で一人暮らしすることになったのだけれど。その結果、非常に日常的な『怪異』と関わることになるのだ。

いた。今日は両親の出発前の最後の食卓。しばらくは家族でそろってご飯を食べる、なんてことはできなくなるから、今日はなるべく早く帰りたい。家に着くと、『古橋』という仰々しい木の表札がかけられた門の格子扉を少し軋ませながら押し開け、庭の松の木などから漂う濃い草木の香りが立ち込める玄関までの道を歩く。

価格が安い時代に運よくこの土地を買ったので、古橋家の敷地は広い。現在のこの地域の地価相場を聞いた時には驚いたものだ。これもお稲荷様の加護なんだろうか。玄関の引き戸を開けると、お肉の焼けるよい匂いがふわりと鼻先をかすめた。今日のご飯は牛肉の野菜炒めかな。その匂いを嗅ぎながら、私は晩ご飯の中身を推測する。玄関には母の履物の他に、父のくたびれた革靴が乱雑に脱ぎ捨ててあった。それをため息をつきながらそろえ、自分の靴を並べてから、私は上がり框に足をかけた。

「ただいま！」

「はるか、おかえりー。いつもより早かつたわねえ」

台所の方に向に声をかけると母の軽やかな返事が返ってくる。この声もしばらく聞いてないと思うと、なんだか感慨深い。

父からの返事はないので、おそらく炬燵^{こたつ}で寝てしまっているのだろう。耳を澄ますと、居間の方から予想通り微^{かす}かないびきが聞こえた。

「うん。出発前夜だし、さすがにね」

そう言いながら二階の自室へと上がり、スクールバッグをポンとベッドの上に放る。そして赤いチエックのスカートと紺色のジャケットの制服を脱いで、部屋着に着替えた。鏡を確認しながら背中までの黒髪をシユシユで一本に束ね、階段を下りて台所に向かう。入り口から中を覗き見ると、食事の準備をする母の華奢な背中が見えた。

「なあに？ つまみ食いに来たの？」

母は私の気配に気づくとこちらをちらりと見て含み笑いを漏らしながらそう言つた。

「ううん、お手伝い。なにかすることある？」

私は、料理をあまりしたことがない。こうやって母の横からたまに手伝いをする程度だ。そんな私がいきなり一人暮らし大丈夫かなという心配はあるけれど、レシピ本やレシピサイトを見ながらならきっとなんとかなるだろう。そういうところは私は楽天的なのだ。

万が一自分に料理の才能がなくとも——少なくとも、従兄弟の末散兄ちゃんが来

てくれる日は美味しいものが食べられる。未散兄ちゃんは私と違つて料理上手だ。

「じゃあ、この皮を剥いて？」

母はそう言いながら茹で上がったジャガイモが入った笊をこちらに差し出した。それは見るからに熱そうで、私は思わず辟易とした顔をしてしまう。

「切れ込みを入れてるから、両手で引っ張るだけで剥けるわよ。冷えると皮が剥けにくくなるから、早くやる」

「ふえーい」

私は唇を尖らせて返事をすると、ジャガイモの皮を剥きにかかった。このジャガイモはボテトサラダになるそうだ。ブチトマトや漬した茹で卵が入った母のボテサラは私の大好物だ。「あちあち」と小さくつぶやきながら、ジャガイモの皮を両手で引っ張る。すると母の言う通りつるりと皮が剥け、ほくほくと美味しそうな湯気を立てる白色が茶色の皮の下に現れた。

「うわ、美味しそう。このままバターを塗つて食べたい」

「ほら、バカなこと言つてないで早く剥く」「ふえい」

「うつ……」

深刻そうにため息をつかれ、私は言葉に詰まってしまった。
母に急かされ、生睡を飲み込みながら残りのお芋を剥いていく。ふと視線を感じて隣を見ると、母がなんだか不安げな表情でこちらを見つめていた。
「ちゃんとはるかに料理を教えておけばよかったわねえ。はるかの料理で、お稲荷様はご満足するのかしら」

「うつ……」

深刻そうにため息をつかれ、私は言葉に詰まってしまった。

そう。今までのお稲荷様へのお供え物の支度は祖母の存命中は祖母と母が交代で、祖母が亡くなつてからは母一人で行つていた。

……私と父は完全にノータッチの役立たずである。

言い訳をさせてもらうと、今年の夏まで私は部活で忙しかった。都内の高校の中でも上から数えられるくらいに強いバスケット部でレギュラーだったのだ。だけど夏にあつた練習試合でアキレス腱を断裂してしまい、部活は当然そのまま引退。受験勉強に勤しみながら、今まで母に任せっきりだつた家事を手伝おうかと思つていた矢先に、この海外赴任が降つて湧いたわけだ。

ないし」

そう言いながら、私は最後のジャガイモをつるりと剥いた。

「そうよね、うん。はるかは私の子だもの。料理もきっとすぐに覚えるわね」

「お母さんのレシピノートとかないの？」

「ふだん食べているものは慣れと勘で作っちゃってるから、そういうものはないわ

ねえ」

……そつか。じゃあ本当に一から模索していくしかないのか。

それはそれできっと楽しいだろう。お稻荷様にはしばらく美味しいものを食べさせてしまうかもしれないけれど。

愛らしい声で『コン』と鳴くあのお稻荷様を思うと、少し申し訳ない気持ちになる。

「さ。今度はこれを潰して」

ボウルに入れたジャガイモを母に手渡され、私はそれを木べらでざくざくと潰した。



「じゃあ、行つてらっしゃい！」

翌日。私は父と母を空港で見送った。娘にべつたりの父は、その細い目を涙で潤ませている。それを見ていると私も泣きそうになつたけれど、ぐつと堪えて笑顔で一人に手を振つた。

空港から我が家までは片道二時間近くと、そこそこに遠い。高速バスに乗つて東京駅に行き、中央線へと乗り継ぐ帰り道だ。時刻はちょうど帰宅ラッシュの時間だったけれど、始発だったので運がいいことに椅子に座ることができた。暖房で暖かな電車の中ではつと一息ついたとたんに——ふつと気が緩んだ。

「う……」

私は数年、一人で過ごすことになる。いくら未散児ちゃんが来てくれるといつても、毎日というわけじゃない。広いあの日本家屋で一人きりなのだ。それを考へると急に、胸に寂しさが募つた。

涙がせり上がり、頬をぼたぼたと伝つていく。
昨日食べた、母と作つたほくほくのポテサラ。甘辛い味つけの牛肉の野菜炒めの味。

父と母の笑う顔。ぐるぐるとそれらが脳裏を巡って、マドラーでかき回したみたいに感情を激しくかき混ぜる。

「ううつ」

嗚咽^{おえつ}が口から漏れそうになり、私は慌てて手で口を塞ぐ。目の前に立ったサラリー マンのおじさんが、こちらが泣いていることに気づくと気まずそうに目を逸らした。なんだか申し訳ない気持ちになつて、さらに泣けてしまう。

暗い窓ガラスに映る自分は、自己憐憫^{れいみん}に酔つた、同情してほしいと言わんばかりの女のように見える。そんな情けない自分の姿を衆目に晒^{さら}しているのが恥ずかしくて、私は涙を止めようと歯を食いしばつた。

——その時、ふわりと頭を撫でられた。
優しい手は、何度か頭を撫でた後にゆっくりと離れていく。私は驚いて勢いよく顔を上げ、周囲を見回した。

私が座っているのは一番端っここの席で、唯一隣に座っているOLのお姉さんは疲れているのか大口を開けて爆睡^{ばくし}している。目の前のおじさんはつり革に両手で掴まつていて、気まずそうに目線を逸^そらしたままだ。

「靈現象[?]」

涙声で思わずぱつりとつぶやくと、耳元でなんだか不満そうな『コン』という鳴き声が聞こえた。

……お稲荷様だ！

そう気づいた瞬間。心にじわりと温かい気持ちが広がり、涙が急に引っ込んだ。そうだ、私は一人じゃない。姿は見えないけれど、ずっと一緒にいたお稲荷様がいる。
帰つたら、ご飯を作つてお供えしなきや。……美味しいものが作れるかは、わからないけれど。

家に着いた頃には、時刻は夜九時になろうとしていた。近所のスーパーにも寄つて

帰つたので、帰宅がなおさら遅れてしまったのだ。

「今夜はカレー。これならたぶん、私にも作れるはず。中学生の時に授業で作った記憶もあるし……おぼろげにだけど」
ビニール袋からガサガサと材料を取り出して、シンクの隣の台にざつと広げる。そして、カレーのパッケージの裏に書いてある作り方と睨めっこした。
カレーは便利だ。こうして箱の裏に作り方が書いてあるんだから。スマホでいちい

ち確認しながら作らずに済むなんて万々歳である。

「ふむふむ。野菜を切つて、お肉と炒める」

まずは人参を取り出すと、よく洗つてから皮ごと輪切りにする。ちょっと不格好な形になつてしまつたけれど、煮込んでしまえば大丈夫だろう。そういえば人参つて皮を剥くんだっけ？まあ、いいか。切つてしまつたし。

ジャガイモも……皮を剥かないといけないんだろうか。これも面倒だから、剥かなくていいか。皮つきのじやがバターなんてものもあるから、きっと大丈夫。玉ねぎはさすがに剥くけれど！

「うわ！ 沁みるっ！」

包丁を入れると、玉ねぎの成分が空氣中に散つて容赦なく目を攻撃する。帰り道とは別の理由で、私はまた涙をぽろぼろと零した。こんなものは早く終わらせようと、玉ねぎは手早く切つてしまつ。少し一片が大きい気もするけれど、これも煮込んでしまえば大丈夫のはず。

「おお、それっぽくなつてきた！」

ボウルに刻まれた野菜たちを入れて、私は得意げな気持ちになつた。なんだ、やれ

ばできるじやない。お肉はちゃんとカレー用と書いてある牛肉を買つてきた。これで間違いないだろう。

鍋を熱して材料をぜんぶ放り込む。そして木べらで数分炒めてから、お湯を目分量で入れた。計量カップの場所なんて、知らなかつたのだ。後で探そう。

まあ、なにはともあれ、あとは煮込んでルウを入れれば完成だ。
「料理なんて、簡単じやない。そいいえは煮込み時間つて何分だっけ……。あ、箱。捨てちゃつた。まあ適当でいいか」

五分ほど煮込んだ後に鍋の蓋ふたを開けると、灰色のなにかが表面に浮かんでいる。これが旨味成分というヤツだらうか。

私はルウをふた欠片かけら入れると、ぐりぐりとおたまで鍋をかき回した。

「そうだ！」

チンするご飯を温めるのも忘れてはいけない。電子レンジにご飯を放り込むと、六百ワットで二分を選択。炊飯器？明日になつたら、使い方を覚えるつもりだ。

——なんて完璧なんだろう。台所に漂うカレーの匂いを嗅いでいると、なんだか誇らしい気持ちになつてくる。

「ご飯が温まつたことを告げるピーッという電子レンジの音が、私を祝福するファンファーレのようにも聞こえた。白いお皿にご飯とカレーを盛りつけて、私はお稲荷様のもとへ向かった。

「お稲荷様、お稲荷様。こちらが今日のお供え物です」

いつも通りの口上を述べて、お社の前の石台にカレーを置く。すると少しの間の後に、ざわりとなにかが蠢く気配がした。私を取り巻く空気が、なんらかの質量を含んでずしりと重くなり、そのまま肩へのしかかつてくる。私はその重さに耐えきれず、ひれ伏すように地面に両手をついた。重い空気が触れた肩から、ぞわぞわと這い上がつてくるような悪寒が広がる。

「なに!?

誰かの怒りが空気を伝播でんぱしてくる。そのことに私は激しい動搖を覚えた。

逃げ出したくても体が重く、次から次に冷や汗が溢れ、頬や額を流れていく。

ギ、ギ、ギ……

小さく軋む音を耳にして、私は唯一動かせる目を動かした。するとお社の木の扉が……少しづつ開くのが見えた。そして隙間から、鈍く光る金色の瞳が覗く。

——あり得ない。

あそこには人どころか、猫一匹すら入る隙間はない。では『あれ』はなんなのか。全身の肌が粟立ち、歯の根が合わない。私はなにか、お稲荷様を怒らせるようなことをしてしまったのだろうか。

一陣の風がぴゅっと笛のような音を立てて吹き抜けた。それにつられるように社の扉が一気に開き、中にいたなにかが飛び出してくる。

私はあまりに恐ろしくて、ぎゅっと強く目を閉じた。

「不味い！こんな不味いものは、はじめて食つたわ！このバカ娘が！」

そんな私の頭上に降ってきたのは……怒りに満ちた、男の人の声だった。

第一章 お稲荷様と初心者カレー

「はっぴえええ！ お社に不審者ああ！」

「誰が不審者だ！ たわけ！」

恐怖で悲鳴を上げると、また怒号が飛んでくる。

おそるおそる下に向いていた視線を少し上げると、白い足袋たびと赤い草鞋わらじを履いた足が見えた。

——足袋たびに草鞋わらじ……？

現代日本であまり見ないそのアイテムに首を傾げながら、視線をゆっくりと上げていく。すると緋色の袴はかまが目に入り、その次に……ふかふかの銀の尻尾わらじが見えた。

「……尻尾？」

「いつまで這いつくばつているつもりだ」

横柄で不機嫌そうな男の声が喰るよう^{うな}に言葉を紡ぐ。そして両脇に手を差し込まれ、

私は子供のように持ち上げられた。

「うわ！ なにすんの！ 痴漢！ セクハラ！」

「痴漢？ 守り神に対して、なんという口をきくのだ！」

……守り神？

その言葉にハッとして、私は改めて男の姿を確認した。

この世のものとは思えないくらいに整った顔がまず目に入る。次に美しい金色の瞳と、煌めく銀色の髪が。狩衣と言うのだろうか。白の上着のようなものの中には、緋色の着物と袴はかまが覗いていて、まるで神主さんのような服装だ。

そして男性の頭の上には、本物としか思えない狐の耳が鎮座していた。それはびるびると愛らしく動いている。まさか、この人は……

「……お稲荷様？」

私は半信半疑で、その名前を口にした。

「そうだ。このバカ娘」

推定お稲荷様らしい男性は尊大な態度でそう言うと、ふんと小さく鼻を鳴らした。

「……嘘だあ」

思わず小さく声を漏らすと、お稲荷様の眉間に深い皺が寄る。せっかく綺麗な顔をしているのに、不機嫌な表情で台無しだ。

「なぜ、嘘だと思う」

「その。もっと違うお姿を想像してたんですよ……」

それに、精巧なコスプレの不審者っていう可能性もまだぜんぜん捨て切れていないし、という言葉を私は呑み込む。それを言えば、また恫喝どうかつされると思ったからだ。

先ほどの怪奇現象のことも踏まえて、ひとまず彼が本物のお稲荷様である、という前提で考えるとして……いつもあんなに愛らしい声で『コン』と鳴いて食事を喜んでくれるお稲荷様が、こんなふうに脅かしてくる成人男性だなんて。

それは……非常に残念なことだ。

「もつと小さくて可愛くて、ふわふわした毛玉みたいな小狐を想像してたのに……」

ついついそんなぼやきが漏れる。それを聞いたお稲荷様は眸まなこを上じょうげた。

「あいにく小さくも毛玉でもない。それよりも……なんだ、あの不味い飯は」

お稲荷様はそう言うと、私が作ったカレーにちらりと目をやる。

「……不味かったですか？」

「おぬし、自分で味は見とらんのか？」

地面に下ろされ、食つてみろとばかりにカレーを頬で指し示された。

……いくら私が料理初心者だからって、カレーがそうそう失敗するわけないじゃ

ない。

我が儘なお稲荷様だと思いながら、お社に近づきカレーをスプーンで掬すくつ。お腹も空すいていたので、それを思い切り頬張つた。

「うわっ。不味い」

……口にしたカレーは、驚くくらいに不味かった。

まず、ルウが足りていないうで味が薄い。そして野菜の切り方が大きすぎたのか、煮る時間が足りなかつたのか、中にぜんぜん火が通つていない。ジャガイモは口の中でジャリジャリするし、人参は半生どころじゃない生だ。それを噛めば噛むほど、青臭さがじわりと口中に広がつた。

肉が生じやないのが唯一の救いだろうか。

吐き出しそうになるのを堪え、懸命に咀嚼そしゃくしぐつと飲み込む。食べ物を粗末にして

はいけないのだ。

……これは、怒られても仕方がないかもしない。
「……不味かろう」

お稲荷様は哀愁を帯びた瞳で私を見つめる。私はコクコクと、涙目で何度も頷いた。
「これは、とても不味いですね。びっくりしました」

「……私も驚いたぞ。つい、人間の前に姿を見せてしまふくらいにな」

……私のご飯が不味かつたせいで、お稲荷様はうつかり姿を現したのか。それは申し訳ないことをしてしまった。

「作り直せ、今すぐ」

お稲荷様は尊大な口調で言うと、ふわりと宙に浮かんであぐらをかく。そして大きな尻尾を不機嫌そうに振った。その姿を見て、私はあんぐりと口を開けた。

こんな不可解な力を使う人間がいるはずがない。これで『精巧なコスプレの不審者』という線は、完全に消えたわけだ。

しかし、作り直せと言われてもなあ……正直、どうしていいのかわからない。

「お稲荷様！」

「……なんだ」

意を決して呼びかけると、お稲荷様はうるさいと言わんばかりに銀色の耳をぴるぴる動かしながら返事をする。

「お稲荷様はこの家の者を助け、見守る存在なんですよね」

「まあ……そうだが」

渋々という口調で返され、胡乱な目を向けられる。そんなお稲荷様に、私は一步一歩とにじり寄った。

「私、今すごく困ってるんで、助けてください！」

「だからどうして、こうなるのだ！」

「大事な古橋の家の者が困ってるんですから、お手伝いくらいしてくださいよ」

私は、再び台所に立っていた。

……今度はお稲荷様と二人で。

一人で知恵を振り絞つても、この事態の解決方法なんて浮かばない。そう判断した

聰明な私は、お稲荷様のお知恵を借りようと思ったのだ。

お稲荷様のお社は古橋家五代——私で六代目になる——にわたって受け継がれてきたものだ。お稲荷様は少なく見積もつても、その受け継がれた分の時間を生きていることになる。

そんなに長く生きているんだから、私よりいろいろな経験をしているよね。きっといいアイデアも授けてくれるはずだ。

お稲荷様は不機嫌そうにしているけど、私の隣に立つて、硬い野菜が浮いたすつかり冷えたカレーの鍋を見つめている。文句は言いつもちゃんと母の可愛いエプロンまで着けているのだから、案外律儀な人なのかもしれない。

「食べ物を捨てるのはもったいないと思うので、これを美味しく再生する方法を一人で考えましょう！」

「これが、まともな飯になるのか……？」

ペしょりと大きな銀色の耳と尻尾が垂れる。先ほど怒鳴っていた時の^{はつき}覇氣はなく、どこか元気もない様子だ。いつものご飯の時間はとっくに過ぎてるので、お腹が減っているのかもしれないな。

——彼は人間の私から見て当然『異質』だ。

なのにすでに警戒心が薄れているのは、彼が、私が生まれた時から側にいたお稲荷様だからなのかな。あの愛らしい『コン』というお札をこの人が言っていたのだと思うと、怖がるのもバカラしくなってしまうのだ。

「しばらく母は戻りませんし。二人で知恵を絞つて、この苦境をどうにかしないと……ご飯がずっと美味しいままでよ」

「娘と小僧が家を空けることは知っていたが、まさか数年もおらぬとは。なぜ、小娘に料理を仕込みますに行つてしまつたのか……」

「急に決まった海外赴任でしたしねえ」

「おのれ、カイガイフニン……！」

お稲荷様はそう言うと、悲しげに大きな尻尾を揺らした。

娘って、母のことだよね。長生きなお稲荷様からすると、三十代の母も『娘』扱いらしい。母が聞いたなら喜びそうだ。小僧は父のことだろう。くたびれたサラリーマンである父と『小僧』という響きはなんともミスマッチだ。

そして『小娘』が……私が。お稲荷様には名前を覚えるという習慣はないのだが

うか。

お稲荷様はどうして、うちの守り神になったのかな。

そんなことが、ふと気になった。

昔はお稲荷様と古橋家のことを記した先祖の手記があつたそうなのだけど……先の大戦の時に焼けてしまったのだ。

手記の詳しい内容を覚えていただろう曾祖母は祖母が幼い時に病で亡くなつており、曾祖母から口伝でしかその内容を聞いていない祖母の記憶は断片的だった。

そしてその祖母も、二年前に亡くなつている。

せつかくお稲荷様とお話ができるようになつたんだし、いずれ聞いてみたいな。

……それよりも、まずは目先の食事だよね。

私は鍋に向ける。そして次に、お稲荷様に視線をやつた。

どうしましようか、という思いを込めつつ見つめていると、お稲荷様がふつと大きなため息をつく。

「……ひとまず、もっとよく煮込め。あれでは食えたものではない。野菜に皮がついておつたし、できれば少し長めに」

そしてそう口にしたのだった。

言われた通りにくつくつとろ火で煮込んでいると、野菜がくつたりとしてきたような気がする。生々しさを主張していた玉ねぎはしんなりとし、ジャガイモは見るからに柔らかそうだ。……人参だけは、見ただけじやわからぬけれど。

「お稲荷様。この人参、いけると思います？」

「味見をしてみればいいだろうが」

「……それもそうですね」

先ほどの青臭い味を思い出してもう躊躇したけれど、味を見ないとまた悲劇が起きそうだ。おたまで人参を一つ掬うと、それを指でつまんで口に入れた。そしておそるおそる咀嚼する。

「味見をしてみればいいだろうが」

私は心底安堵した。これは食べられるものだ。

「ちゃんと煮えています！ お稲荷様！」

「煮えておるのがふつうだ。たわけが」

じりりと金色の瞳で鋭く睨まれてしまつた。そうですよね、申し訳ありませんね！」

「これにルウを足したら今度はちゃんと食べられるカレーに……なると思います。たぶん」

一度失敗したので自信満々には言えないので、そのはずだ。

ルウをふた欠片かけら投下して、ぐるぐると鍋をかき混ぜる。すると鍋の中身が、とろりとした重みかげらを増した。

「もうひと欠片かけらくらい足したらどうだ。鍋の中身が多すぎる」

お稲荷様の言う通り、私が入れた材料は規定量より多いようだ。

「なるほど。では、入れてみます」

もうひと欠片かけらルウを足して鍋を混ぜていると、お稲荷様がまた口を開いた。

「小娘。火を点けたままだと、溶けにくそだ。一旦火を止めてから混せてみてはどうだ」

「お稲荷様、素晴らしい観察眼です！ 慧眼けいがんというやつですね！」

「……ふん。それほどでもない」

口調はツンとしつつも、お稲荷様の表情は少し嬉しそうに見える。銀色の大きな尻尾は左右に振られ、耳もぴこぴこと動き忙しない。

狐つて、イヌ科だつたつけ。尻尾の役割は犬と同じなのかな。これは、褒められて嬉しがつている……と思つていいのだろうか。

「ルウも溶けたっぽいですし。そろそろ完成、ということでいいですかね？」

「……いや、もう少し煮込もう。先ほどのことがあるからな」「確かに……」

先ほどの不味いカレーのことを思い返し、弱火で再点火する。

……今度こそ美味しいカレーになりますように！

そんなことを願いながら五分ほどさらによく煮込み、ご飯をチンして皿に盛り、カレーを上からかけると——

そこには『ふつうのおうちカレー』が鎮座していた。

野菜は皮つきだったりサイズが不揃いだったりで不格好だけれど、食べられそうな風格を感じる。素晴らしい！

「おお／＼っ！」

私とお稲荷様は思わず歓声を上げた。

ノリでハイタッチをしようとしたら、こてりと首を傾げられる。どうやらお稲荷様

は、ハイタッチを知らないらしい。行き場のない私の両手がふわりと宙をさまよつただけになつて、少し恥ずかしい。

「できたのなら、それを社まで……」

「いや。せっかくですし、一緒に食べましょうよ」

帰ろうとするお稲荷様の尻尾を掴んで引き止める。するとお稲荷様は、苦虫を噛み潰したような顔になつた。

「なぜ……一緒に食べねばならぬのだ」

「そりや、寂しいからですよ」

一人でいるのはやっぱり寂しい。

旅立つ父と母を見送つて、私はそれを実感した。

図々しいことは百も承知しているけれど、そんな私にお稲荷様の存在は渡りに船である。食卓は、やっぱり誰かと一緒にがいいのだ。

たとえそれが、人外であつたとしても。

人でないとはいえ、お稲荷様は我が家の中守り神だ。一緒に過ごした十数年の間に、彼が悪さをしたことはない。だからおそらく大丈夫。

私は考え方の根っこが楽天的なのだ。

……友人には、考えなしとも言われるけれど。
「一緒に食べててくれるなら、お酒も出しますよ。お父さんが置いていったのがたくさんあるので！」

ワインセラーには大量のワイン、棚には焼酎[よつちゅう]が並び、我が家にはいろいろなお酒がある。お稲荷様に捧げたのなら、お父さんも怒りはしないだろう。……とはいって、高そうなのは一応避けるけど。

神様への捧げ物としても、お酒は定番だもんね。御神酒おみきなんでもものもあるくらいだし。

「くつ、酒か！」

お稲荷様は私から見ても丸わかりなくらいに、ぐらぐらと気持ちが揺れているようだ。よかつた、お酒が好きみたいで。

「お稲荷様……」

「……す、少しだけだぞ！」

お稲荷様は大きな大きなため息をついた後に、眉間にぎゅっと皺を寄せながらそう言つた。

「わあ！ ありがとうございます！」

「本当に前は……。私を恐れるわけでもなく、崇めるわけでもなく……おかしな小娘だ」

……そうだ、先ほどから気になることがあったのだ。

「はるか」

「ん？」

「私、はるかって言います。そう呼んでください。お稲荷様のお名前も、教えてくれると嬉しいです」

私には親がつけてくれた素敵な名前があるのでから、ちゃんとそれで呼んでほしい。お稲荷様の主義的にそれが不可能な場合は、小娘のままでも別にいいけれど。

「わかつた、はるかだな」

断られる想像もしていたのだけれど、お稲荷様はあっさりと私の名前を呼んでくれ

た。おお、名前を呼ぶ習慣 자체はあつたのか。

「お稲荷様のお名前は？」

「仲間内ではぎんいろと呼ばれている」

仲間内って、他のお稲荷様のことかな。稻荷神社は、全国にたくさんあるもんね。

どんな字を当てるか訊いてみれば、音の通りの『銀色』でいいそうだ。……見たまんまでの名前だな。

お稲荷様たちには名前を重視する習慣がないのか、それとも本当の名前を隠しているのか。なにはともあれ、呼べる名前ができたことは喜ばしい。

「では銀色様、ご飯を食べましょう！」

カレー皿を二つ持つて居間に向かうと、銀色様も尻尾を揺らしながら私の後ろをついてきた。

炬燵のスイッチを入れて、どうぞどうぞと彼に勧める。炬燵ははじめてなのか、最初は警戒していた銀色様も、足を入れた途端に「ほう」と息を吐いた。

「これは……なかなか」

「炬燵は、はじめてですか？」

「目にしたことはあるが、入るのははじめてだ。こんなに心地がよいものだとは……」天板に頬をぴったりつけて、尻尾をぶんぶんと振る銀色様は……成人男性の見た目をした方に言う言葉ではないけれど、非常に愛らしく見える。

「銀色様。炬燵もいいけど、ご飯を食べましょう」

私はそう言いながら、棚に並んだ焼酎を漁る。そしてスーパーやコンビニでも見る一般的な銘柄のものを手に取って、氷を入れたコップに注いで銀色様に手渡した。

「銀色様。お酒をどうぞ」

「焼酎か。焼酎は好きだ」

ふんふんと中身の匂いを嗅いで、銀色様はほにやりと表情を緩めた。よかつた、高級なものじゃないと口に合わない、なんてことはなくて。

「はるかは呑まんのか」

「呑みませんよ。私未成年ですし」

「ホーリツというやつか。人間は不便だな」

銀色様はそう言いながら、さつそく焼酎をぐびりとあおる。そして紅い唇を舌でぺろりと舐めた。

「うん、美味しい」

満足そうにつぶやいて、今度はカレーをスプーンに掬う。^{すく}そしてどこか神妙な面持ちで、それを口に運んだ。

私は銀色様の反応をドキドキしながら見守った。今度こそ、お口に合うといいのだけれど。味見をした感じは、悪くないとと思ったんだけどな。

銀色様はしばらく口をもぐもぐと動かしてから、カレーをごくりと飲み込んだ。

「うむ、今度は食べられる」

ほっとした表情をした彼は、またカレーに口をつける。それを見て安堵感が胸に湧き、肩の力がふつと抜けた。

「ほれ、はるかも食べんか」

「あつ。そうですよね！」

お行儀悪くスプーンでこちらを指す銀色様に言われて、私も慌ててカレーに手をつ

けた。カレーはごく一般的な『おうちカレー』の味がする。だが、これがいいのだ。

「ちゃんと、美味しいですね」

「あとは米がふつうの米だったらなあ。レンジでチンする米とやらより、やはり炊き

立てが好きだ」

「……明日は、お米をちゃんと炊きますね」

スマホでやり方をきちんと調べてから炊こう。今日のような失敗をしたら、絶対にまた怒られる。そんなことを思いながらカレーを食べていると――

指先に、毛玉のようなものが触れる感触がした。

視線を動かしそちらを見ると、ふわふわとした白い毛の小狐が私の周囲をうろついている。これは銀色様の……関係者？ かな。

恐る恐る抱き上げると、小狐は大人しく私の腕に収まつた。

「か、可愛い……！」

もふもふだ。すっごい毛並みのいいもふもふだ。

「なんだ白丸、お前も来たのか」

銀色様がその小狐に声をかけると、小狐は鈴の鳴るような声で『コン』と鳴いた。

「うわー、白丸くんって言うんでちゅか？ もつふもふでちゅねえ！」

人はなぜ、可愛い生き物を目の前にすると幼児言葉になつてしまふのか。私は『白丸くん』を抱きしめて、その柔らかな毛並みを堪能した。

白丸くんは大人しく私に抱きしめられていて、頬を時々ぺろぺろと舐めてくる。なんて可愛いお狐様なのだろう。

「……はるか。その気色の悪い言葉遣いをやめろ。白丸は神格に近い化け狐で、お前より五十年は長生きしておるぞ」

銀色様の言葉を聞いて、私はぽかんとした。

……この可愛いお狐様は、父母よりも年上らしい。神格に近いっていうのは、神様に近いということかな。

「そ、それは失礼を」

白丸くんを床に下ろして慌てて謝罪すると、気にするなというように指をぺろぺろと舐められる。

……可愛い、やっぱりもふもふしたい。

そんな気持ちが湧くものの、私は自重して頭を撫でるに留めた。ああ、本当に可愛いなあ。

「白丸にもカレーを出してやれ」

「え、でも。玉ねぎが……」

犬猫に玉ねぎをあげてはいけない。それは彼らにとつては毒なのだ。

「大丈夫だ。白丸はふつうの狐ではない」

「はあ、でしたら」

私は立ち上がりと台所へ向かう。そして小さな皿に白丸くん用のカレーを盛った。カレーを持って居間に戻ると、白丸くんが白く大きな尻尾を振りながら私を見上げている。……語彙力を失うくらいに可愛いな。

床にカレーを置くと、白丸くんはそれをはぐはぐと小さな口で頬張った。そんな彼を横目に見つつ、だらしない笑みを浮かべているだろう私もカレーを食べる。銀色様の食事は進んでいるようで、いつの間にやらお酒のコップも空に近い。

「もう一杯、呑みます?」

「うむ」

おうよう焼酎しゃちゅうの瓶を持ちつつ訊ねると、銀色様は鷹揚に頷く。コップにまた焼酎しゃちゅうを注いであげると、彼は嬉しそうに目元を緩ませた。

「白丸くんも、呑むのかな」

「まだ早い」

銀色様はぴしやりとそう言つた。

玉ねぎはよくて、お酒はダメなのか。さつきは私にお酒を勧めようとしたのに、銀色様の基準はよくわからない。

「じゃあ……白丸くん、オレンジジュース飲む?」

冷蔵庫にたしかあつたはず。そう思つて訊ねると、白丸くんは『コンコン』と二度鳴いた。これは『欲しい』ってことなんだろうか。

ひとまず台所に行つて、自分と白丸くんの分のオレンジジュースを用意する。白丸くんのコップは浅いマグカップだ。これなら彼でも飲みやすいはず。

「はい、どうぞ」

居間に戻つてオレンジジュースを床に置くと——

白丸くんは床にぺたりとお尻をつけて人間のようになどり、ピンクの肉球のついた愛らしい両手でマグカップを挟んで持ち上げた。その光景を見て、私は目を丸くする。

そんな私を尻目に、白丸くんはカップからくびくびとジュースを飲む。そして満足

「白丸くん、器用」

「そりやあな。見たまんまの小狐ではないからの」

銀色様はとうとう手酌で焼酎を注ぎはじめた。彼は本当にお酒がお好きらしい。カレーハンの皿も空になっていたので「お替わりは?」と訊ねると、「くれ」と短い返事が返ってくる。

……銀色様って、見た目は二十代の美青年だけれど、会話をしていると偏屈なおじいちゃんを相手にしている気分になるな。そんな失礼なことを思いながらカレーのお替わりを用意し、炬燵に入つてテレビをつける。

テレビでは、明日の夜は大雨になると、そんな予報を流していた。

「銀色様。明日の夜は大雨なんですか?」

「ふむ。そうか」

「だからまた、うちでご飯を食べません?」

「大雨」と『だから』がどう繋がるのだ

銀色様が眉を顰めてこちらを見つめる。

綺麗な瞳に見つめられて落ち着かない気分になりつつも、私は口を開いた。

「冬に大雨なんて、明日は寒いに決まっています。炬燵に入つて、ぬくぬくしながら

【物語】

お酒を呑んで。そうしながらご飯を食べた方が、美味しく感じると思いませんか?」

「ぬう。炬燵、酒……」

銀色様は二つのワードにつられ、明らかな思案顔だ。よし、もうひと押し。

「デザートもつけます」

「でざあと」

「学校帰りにアイス——甘い氷菓を、買って帰ります。溶けて汚れちゃうから、アイ

スはお社の前に供えたこと、ないですよね? 美味しいんですよ。冬に炬燵でぬくぬくしながら、冷たくてあまいアイスを食べるの」

悩む銀色様の周囲を、白丸くんが『コンコン』と鳴きながらくるくると回っている。白丸くんの方は、もうすでにアイスを食べる気満々らしい。

「……仕方がない」

銀色様は大きな大きなため息をついて、明日も来ることを約束してくれた。

しばらく呑んでくつろいだ後に、銀色様は「帰る」とそつなく言った。それを聞いた白丸くんも、私の膝の上から床へすとんど下りる。膝に乗せて、ずっと撫でていたんだよね。ああ……可愛いもふもふが去つてしまふ。

……銀色様に聞きたいことがいくつかあったのに、訊けなかつたな。

——どうして、古橋家を守つてゐるんですかとか。

——どうして、今まで姿を現さなかつたのですかとか。

——一体、いくつなんですかとか。

——そのふわふわの尻尾を、もふもふしちやダメなんですかとか。

一度に訊ねるとこのお稻荷様は脣を曲げそだから、少しづつ距離を縮めて訊いた方がいいのかな。

「あつ、そういうば！」

お社へ帰ろうとする銀色様にお見送りでついていこうとして、お礼を言うことがあつたのだと思い出した。

「銀色様、銀色様」

「なんだ」

名前を呼ぶと、銀色様は眉間に皺^{しわ}を寄せながらこちらを向く。私は銀色様の前に立

つと、ぺこりと頭を下げた。

「今日は電車で励ましてくれて、ありがとうございました！」

頭を撫でて、『コン』と鳴いて。励ましてくれたのは、とても嬉しくて心強かつた。あの時は……私は一人になるんだと思っていたから。

銀色様が視線をさまよわせる。そして足元の白丸くんをがしりと掴んで持ち上げた。「あ、あれは白丸だ。私ではない」

白丸くんを見ると、彼はぶんぶんと首を横に振る。
「はあ」

「私では、ない」

銀色様はそう言うと、真っ赤な顔で、白丸くんを小脇に抱えて去つてしまつた。私がついていく隙もない。

「あれは、照れてるのかな」

眉間に皺^{しわ}を寄せてそうつぶやく私に返事をするのは、ぴゅうと吹く木枯らしだけだった。

第二章 お稲荷様と初心者お鍋

「銀色様〜！」

学校帰りにスーパーで食材を買って帰宅し、お社の前で名前を呼ぶと、社がガタガタと震えはじめた。そして小さな扉が開き、ぼん！ という音を立てて白丸くんが飛び出してくる。

小さな毛玉は私の胸元にぺたりと張りつき、『コンコン！』と可愛い声を上げた。今日も白丸くんは可愛い。両手が食材でいっぱいだから、撫でられないのが口惜しいな。

雨が降るという予報の通りに、空は重たそうな鈍色にびいろをしている。早く家に入らないと降られるかもしれない。

「白丸くん、こんばんは。銀色様は？」
『コン！』

白丸くんが小さく鳴いて鼻先をお社に向ける。するとそこには、不機嫌そうな顔をした銀色様がいつの間にか立っていた。銀色様の不機嫌はデフォルトだとわかつたので、今はそれほど怖くはない。

……せつかくお顔がいいんだから、愛想よくした方がいいのになーとは思うけど。

「銀色様、こんばんは」

「うむ。買い物をしてきたのか、ご苦労」

銀色様は不機嫌な顔をしながらも、私の両手にある重たそうなビニール袋を見てねぎらいの言葉をかけてくれた。なんだかんで、悪い人ではないのだろう。

「今日はお鍋を作ろうと思うんです」

「……ふむ、鍋か」

銀色様の表情は暗い。きっと昨日のカレーのことを思い出しているのだろうな。本当に申し訳ないことをしたと、反省はしている。

「自分一人で美味しいものを作れる自信がないので、今日も見張ってください！ 銀色様！」

「お願ひします！ 味つけに関しては市販の鍋の素を買つてきたんで、絶対に失敗しませんよ！」

「……昨日のカレーのルウも、市販とやらだつたのではないか？」

「それを言わると、痛いですけどねえ」

そんな会話をしつつ、ぽんぽんと跳ねるように歩く白丸くんを先頭にして、私たち
は庭から我が家へ向かつたのだった。

「さて」

台所で鍋の材料を広げて思案する。スマホで調べて買った材料なので、これを切つ
て煮るだけで問題ないはずなんだけど……そんな考えでカレーを失敗したからな。私
は不信感漂う視線をこちらに向ける銀色様をちらりと見た後に、スマホを取り出した。
「野菜を……まずは洗う」

「そこからか！」

尻尾をぶわっと膨らませた銀色様が、激しい口調で抗議をしてくる。

「まさか昨日のカレーも……」

「大丈夫ですよ。ジャガイモは泥がついてたので洗いましたし」

「人参は？」

「……とりあえず、洗いましょうか。あつ、茸は洗わなくとも大丈夫なんですって！」

呆れたようなため息をつく銀色様は置いておいて、私は材料に目を向けた。今日
買ったものは鶏肉、えのき茸(ねぎ)、白菜、水菜、豆腐である。そしてありがたーい、鍋の
素。シンプルなうま塩味とかそういうやつだ。キムチ鍋の素と悩んだのだけれど、白
丸くんが食べられるかわからなかつたし。
もちろん締め用のうどんも買った。これもお鍋の大変な構成要素だ。

「じゃ、私は白菜を洗つて切りますので。銀色様は鶏肉を切つてください」

「なぜ……私が」

「暇そうですし」

そう言つて鶏肉のパックを渡すと、銀色様は今まで聞いたこともないような深い深
いため息を漏らした。

「お前は不敬にもほどがあるのであるのではないか？」

「…………いえいえ、尊敬しております」

「なんだその間は」

立ち読みサンプルはここまで